隣りの騎兵六連隊で兎めしを炊いてくれるんですが、その時は兎の肉と思って食ってましたけど、後で考えるとどうも馬肉なんですね。

炊きたてご飯とおかゆ

英文科に入ろうと思ったのは熊中の三年生の時です。英文学の本を読んでいて大いに感激して、学者になろうと思ったんです。それも、西洋演劇史をやろうと考えてました。ところが、東大の英文科を出る頃になって、あることから、研究じゃなくて、書く方をやろうと思いましてね、自然に劇ということになりました。

「夕鶴」は多分一九四七年の作だと思います。戦争中に、柳田国男さんの監修で「全国昔話記録」というのが出されたんです。それは、民話をその土地の人たちが語ったのと近い型で採集してあって、どこの、なんというおバサンの話というように名前まで載せてあるんです。それを読んで面白いと思って、芝居を書いたんです。

実は、僕の作品の中で民話を素材に書いたものは割りに少くないんです。だけど、民話がくわしいみたいに言われて困るんだけれども、そうでないものがずっと多いんです。リアリズム演劇が多いんです。

僕はね、子供はいないし、子供を知らないし、子供のためにと思って書いたものというのは殆んどないんです。子供を知らないから大きなことは言えないけれども、児童文学というのは、これは子供のためであるとして書くものが多いでしょう。あれは、概して、僕は感心しないんです。せっかくの炊きたてのご飯をね、おかゆにして、消化がいいように食べさせるようなもんですね。全てそれが必要ないとは言わないけれども、これが子供であるという、甘ちょろい考え方を大人は持ってはいけないんじゃないかという感じがします。

僕が一番初めに書いた芝居は「風浪」なんですが、これを書いたのも戦争中ですし、「彦市ばなし」なんかもそうなんですけれども、戦時中ですから発表の機会がないままに持ってたんです。「夕鶴」もその中のひとつなんですが、それを戦後になって、近代的手法で書き直したのが一九四七年だと思います。

今、話に出た「風浪」は明治の熊本が舞台になっているんですが、私が書く頃にはまだ神風連を体験した人がいたんですよ。そういう人に聞いてまわったのと家のひいじいさんがつけていた日記があるんです。去年、熊本県立図書館に寄贈しましたけどね。それには天保何年から五十何年間、ずーっと続いてる日記なんです。それも材料にしたんです。

熊本県のあの時期というのは進歩的なものと反動的なもの、例えば神風連、一方では熊本バンドが吹き出した時期ですよね。そこが興味を引いたんです。

ユーモラス精神

熊本県人気質というと前にチョット書いたことがあるんですが、ある牧師さんの話があるんです。明治でいえば二十年代でしょうね、その方が東京の神学校に入ったんです。その頃熊本じゃ、ヤソなんていったら殴られるようなもんでしょう。夏休みに帰って、傘四番丁を歩いていたらね、向こうから、親戚の中でも一番おっかないおじさんがやって来たというわけです。なんか言わわれるだろうと思って下を向いていたら、「ああた、いま、なんばしょっとな」と聞かれたというんですよ。しょうがないから、殴られる覚悟で「神学校にいきよります」と言ったんですね。そしたらしばらく黙っていて「よかよか、精神しゃが通っとっとしゃがな、よか」と言ったというんですよ。（笑）

つまり、古くさい中に、以外に開明的な新しい考え方が熊本の人にあるんですね。

もうひとつ、これは僕が入る二、三年前の五高の話ですが、六師団の荒木中将が査閲をやった時にね、五高生が小隊長をやってて、突然、なんの必然性もないのに散開の号令を出したというんですよ。荒木中将が「お前、なんでそういう号令をかけた」といったらね「金峰山に雲がかかっています。古書に曰く、遠山に雲かかる時は伏兵あり」とやったというんです、荒木は怒るに怒られず、怒ったという話があるんです。（笑）一種のモッコスですね。ストレートに喧嘩するんじゃなくて、なんともつかず、ユーモラスに抵抗する精神というのが熊本にはあるんですね。

日本に標準語はない

僕は日本にはまだ標準語というものはできていないという考え方なんです。ヨーロッパの場合ですとね、だいたい十四、五世紀から、つまり、中世封建制がこわれて近代的統一国家ができる時代頃から、ドイツ語ならドイツ語、英語なら英語の方言的なものが自然にまざり合った歴史の中で、だんだん統一的な言葉が自然にできてくる。それに、学者や芸術家が手を貸して、例えば、スタンダードイングリッシュができてくるわけです。

つまりね、ドイツならドイツ語をしゃべる広い地域の中で、封建領土がいくつもありますね。この領土の間は関所を設けて交通を禁止しているわけです。だから、同じドイツ語でも、Aという封建領土とBという封建領土は違うドイツ語をしゃべっている。ところが、生産技術が

高まって生産過剰になってくると、どうしても物資の交易をしなくてはならない。そうすると、境い目にマーケットができて、売り買いをするから言葉がまじり合う、と同時に売り買いをする商人、初期のブルジョアジーがでてきて、その力で封建制を倒し、近代的な統一国家ができる。だから、そこで言葉がまざり合う。という言語過程と近代的な統一国家ができる政治過程が紙の裏表になってるわけですね、それがだいたい十四、五世紀です。

日本では、十七世紀の初め、一六〇三年徳川家康が史上最強の封建制をつくって、一八六八年までもてしまうわけですね。日本の場合は生産技術は高まらなくて、生産過剰もないまま、⅔ぐらい外国の力で封建制のフタがパカッと開いて統一国家ができる。時の政府は言葉が通じないと命令がだせないから、政府のあった東京の言葉を標準語と称して、地方に押しつけたわけですよ。歴史の中で自然にまじり合うという過程がなかったわけです。そういう意味で僕は日本に標準語はないという説なんです。

豊かな地域語

方言というと、標準語が位が高くて、方言が下だというニュアンスがありますね。一種の差別意識ですね。それで僕は、方言という言葉を使わないんです。地域語といっているんです。

明治政府が標準語政策をやったでしょう。一番被害を受けたのが沖縄で、沖縄言葉をしゃべった小学校の子供には方言札という札を下げさせるんですね。この札を子供たちがとるためには、友達がうっかり沖縄言葉をしゃべったのを先生に密告しないととってもらえなかったというんです。ところがその沖縄でも那覇の人たちからすると、離島の石垣とか八重山の人たちの言葉に差別意識を持ってたというんですから難しいもんですね、そういうことで、方言という言葉を使わないようにしています。方言を地域語といいかえても問題が解決するわけじゃありませんけどね。

僕は、山口白陽さんの「モッコス語典」を非常に評価してるんです。全国地域にいろんな面白い言葉があるんですね。いい悪いの基準はつけ難いけど、それがなければ表現できないという言い方。味わいとか、力強いとか、美しいとか、それが標準語政策でどんどん消されていくわけです。標準語という名の消しゴムでね。そうじゃなくて、いろんな所にあるいい言葉が全国語として登録されると日本語は豊かになるというのが僕の考えです。

熊本の言葉の中に「こさぐ」という言葉があるでしょう。刃を直角に物に置いてゴシゴシやるやつですね。あれはどうも東京の言葉で言おうとしても言えないんです。削るとは違いますからね。そういうのが、モッコス語典に一杯ありますよ。いくら魅力的な言葉でも、その発想が、その土地でなきゃ通用しないというのはしょうがないけど、そのまま発想が違う所に持ってきても、言葉として通用することがたくさんありますよね。そういうものは活かさないといけませんね。だから各地域でその土地の言葉を保存する運動が一方であっていいと思います。「モッコス語典」のように熊本の言葉を、単に言葉の意味だけでなく、肥後狂句という例を使って使用法、発想まで保存することは非常に貴重なことですね。

断ち物

ある経済学者の話なんですが、昔、学生の頃に断食したことがあるというんです。腹の中に何にもなくなってくると、自分で自分の体を食う理屈になるんですってね。脂肪とかね。そうなると、山の中の断食だったらしいですけど、紅葉の赤とか黄色が、非常にサイケデリックな特別な色に見えてくるっていうんですよ。ふだん見えてるものと違った色にね。「断ち物」というのが昔あったですよ。おばあさんが願をかけて、茶断ちとか塩断ちとか、今の世の中でも断ち物をする必要があると思うんですよ。今はね、表面物資が非常に豊じょうでしょう。不均衡な豊じょうの陰には、必ず不均衡な貧困がある筈なんですが眼にはなかなか見えないですよ。例えば、車を持ってる人が、俺は十年前の車を後十年なんとか使ってみようというように「断ちもの」をひとつかふたつすると、断食して特に色があざやかに見えたように、みる必要があるものが見えてくることがあるような気がします。

ふたつの郷土

僕は本郷で生れ、あるところまで育って、また東京に出てきて本郷に住んでるわけでしょう。だから、本郷が郷土だという意識もある半面、熊本が郷土だという意識も非常に強いわけです。いずれにしても、郷土が二つあるというのはいいことですよ。

僕は熊本の澄んださわやかな秋が、大好きですね。

東京に住んでますと、隣近所の人間関係は稀薄ですね。ことにあの頃の熊本は、人間の付き合いがいい事悪い事ふくめて、ゴシゴシこすり合っているところがありました。それはね、思い出してみると一種懐しいですが、今その中で暮らせばしんどいと思うでしょうね。しかし、最初お話ししたように、保守的な面と開明的な面が濃厚にある熊本で青年期を送ることができたのは、東京みたいな希薄なところでボヤーッとしているよりもよかったという気がしています。